

前田さんのこと——パリ大学都市日本館館長、岩崎力氏への手紙

マルク・メクレアン

親愛なる友よ、いまは亡き前田陽一先生を顕彰しようというかつての教え子や同僚たちの追悼の営みのなかに、貴兄が私をも加えようとしてくださったことを、私は名譽とするものです。貴兄は、あの強烈な人格にまつわる私個人の思い出を紡ぎだすことをお求めです。が、この畏くも孝き務めは、試みるにつけ私を深い困惑へと引き入れるのです。

その理由とてさまざまですが、まずなによりも「駒場以来」流れてしまった年月というものがありません。ご存じのように、前田氏は私を一九五三年秋に駒場に招いてくださり、私はそこで友愛と内的な充足感に満たされて、一九五八年夏まで勤務致しました。一九五八年といえ、私が日本をあとにしてはや三十年がたち、この三十年の間、私が前田氏にまみえたのはただの一度、一九六〇—六二年ごろ、私の記憶にひどい間違いがなければ、東大での「かつての我が学生」たちである、貴方がたの幾人かがお膳立てしてくださった、パリでの夕食会の折りのことでした。誰かれから、前田氏のことを伺う折節は有りましたから、とぎれなくその輝かしい御出世ぶりに思いをいたすことはできました。パスカルに関する博士論文を審査すべく招集された試験官の一員としてのそのソルボンヌへの臨席、研究者としての彼の業績を顕揚する、最近のご受賞。そしてその健康状態に関する翳りある便り、そ

して……。

おそらく我々の間の交渉がかくも疎遠で、音信の交換もなかったことが貴兄をしていぶかしがらしめるかもしれません。これはしかしただ情況のしからしめたところ、引き伸ばされた歳月のなせるわざ、人生航路の分岐という以上の不思議ではありません。わたしはといえ、再び執った教鞭は以来ギリシア・ラテンの古代への傾きを加える一方でしたし、前田氏はいえ、肩幅ひろく、倦むことをしらず、大学での重責に情熱を燃やし、さらにはバスカルの作品と思想とに洞察深い探究をなさるといふ、八面六臂の態でありました。懐かしいコマバを所詮は後にしてしまつた者の影が、漠としたもやのなかに消えてしまわぬためには、個人的で親密な結び付きがなくては適わぬ定めだったのでしよう。

加うるに、私が前田氏に抱いていた友情とは、敬意の念に強く染められたものでした。年下のものとして、名声ある先達、あらゆる点で大人物をまえにしては、その疑いようもない温かみがかえつて、少なくとも私にはなにかの敬遠を課するものだったので。私をほかの同僚たちと結び付けていたような親密さは、言つてしまえば、前田氏との間には存在しなかつたわけです。それゆえ、ほぼ毎日のくつろいだお付き合ひからなら、おのずと出てくる面白おかしく、心温まるような想い出を、細かく正確にお伝えすることなど、私にできることではないわけです。その人物、その器、外交官、また大学行政官としてのその広い経験、その恒なる見識の高さと品位、これはおよそ謙遜な一若輩外国人に、うちとけた逸話の収穫をもたらすような性質のものでは、なかつたわけです。

それでも幾つかのイマージュが、歳月と隔たりとをものともせず、いまでも焼き付いています。

『パンセ』の手稿の写真コピーがきっかけでパスカルについてなされた発見を、情熱に抒情までも込めて私にお告げになったあの日、ご長男を失われた過酷な体験の後に会った際の、威厳と、勇氣と、自制とが、言い知れぬ感銘を呼び起こさせた、あのお顔。そしてまた、我々が前田氏を、貴婦人というべき令夫人とともに食事にお招きしたさいの、包容力ある快活さ。それっぽっち、といわれては返す言葉もないけれど、このような筋金入りの師匠がお相手の場合、顕著で本質的なところだけにとどめるのが、むしろしかるべき有り様でしょう。前田氏への私の顕彰の蕪辞をこれ以上連ねるにはあたりまずまい。

敬意をこめて、親愛なる友へ

〔稲賀繁美訳〕

（元東京大学教師）

二つの姿

モーリス・パンゲ

前田教授に思いをいたすとき、目の前に現れるのは、三十年の年月が隔てる二つの像である。

最初のものの日付は一九五八年七月十三日。長い、それは長い旅路の果てに、私はいましがた日本に着いたばかりのところであった。当時のプロペラ機では、パリからアンカレッジまで、そしてとりわけアンカレッジから東京までは、なんとという長旅だったことだろう。台風接近に伴うじつとりとした空気が、わたしを打ちのめした。羽田からわたしをひきとってくれた自動車を降りるや、なによりもまず、服を脱いでぐっすりと眠りこむことしか念頭になかった。一時間後、人がわたしを起こしてきた。ある日本人のプロフェッサーが私に会いたがっていたのだが、それがマエダセンセイであった。わたしがぼうっとし、呆けて、ほとんど荒んだようになっているぶんだけ、彼は朗らかで快活で、聡く、闊達に見えた。彼の話すフランス語は早口で非の打ち所ないものであった。後日私は彼に言ったものである、「あなたが日本語をお話しになるのに接するたびに、フランス語のとくと同じように容易にお話しになるのには、呆れます」と。どんよりと濁した意識のなかで、彼が私に本郷と駒場の違いを説明しているのは分ったのだが、聞きながら自分に理解できたことは、自分には何も理解できていないということだった。ようやく事が明確になりだしたのは、何日かたって、当時フランス科の助

手を務めていた中村徳泰が、忍耐強く、私に幾つもの小さなデッサンを描いてくれたからのである。

おそろしく生き生きとして、包み隠しのないこの人物、見るからに滔々と弁ずることに喜びを見いだしているこの人物は、慎ましき、ひかえめ、思慮といった、とかく日本人に結び付けるありきたりのステレオタイプをあっさり打ち消していた。この会話、というよりモノローグ（というのも、普段はしゃべりすぎの私もその日はおよそ口を開きはしなかったから）のなかで私がしかと記憶にとどめたのは、前田先生が私を勧告して、教養学科の学生たちにエクスプリカシオン・ドウ・テクストと三部構成の作文術とをちゃんとしつけるように、といわれたことである（「それに、と彼は言ったものだ、これは日本にだってあるんです、序破急っていつて」。良き教育者として、彼は、教師たるもの、知らしめたり、理解させたりするのみならず、為さしめ、習慣づけをみっちりたたきこむべきものだと心得ておられた。ピアノや体操を学んでいればわかるように、自由に動けるようになるには、柔軟な機構を持たねばならない。体を動かすにせよ、精神を動かすにせよ、方法は変わらぬ。もう一度教師としての生涯をやり直すことができるものならば、前田先生が、我々の初めての出会いの熱意と歓待のうちに、私に説いて聞かせたあれらのお勧めを、よりよく適用してみたいところである。

何年もたってからのことだが、なぜ前田先生が、我らのかつてのヨーロッパにあった学校教育の伝統に、かくも愛着をもたれたのかを伺う折りがあった。先生の語られたのは、スイスで学童であった頃に、フランス語圏の教師たちから受けた強い印象であった。とりわけその中のひとりに、厳格だが善良にして公正、規律をたいへん重視する教師がいて、彼に刻印を残した。死を前にして、前田先生

は少年陽一の幼い日々の印象を回想されていたのだ。それは、我々が最後に会った折り、我々が最後に会話を交わした一九八六年六月一日、池袋はメトロポリタン・ホテルにおける、「ガツカイ」の会場でのことであつた。私は彼が会場の、照明され騒がしい大広間に入るのを目にした。私は挨拶しに行つた。ずいぶんお変わりになつていた。痩せられてしまい、危うげに見えた。それでも常変わらぬ意気軒昂たるお姿で、コップを手に、長いこと立っておられた。いつものように、あけっぴろげ、率直でずばりとした物言いであられた。「ご存じのとおり、癌になつちやつたけど、今はもちなおして、ここのところ」。彼のフランス語は相変わらず完璧で、活潑な話し振りも昔ながらだったが、時として、文章の終わりですこしく息切れのするのが耳についた。そうして、彼の幼少の日々をすごした、今や遙かなるヨーロッパでの学童の頃の思い出を私に語つた。オーギュスト・アングレスのような、いまは亡き友人たちを悔やむ言葉があつた。だが、将来もまた彼には大切なことであつた。「僕のパスカルの仕事は続けています。全編揃つて公刊される日をこの目でみたいものです」。かつての学生の幾人もが彼に挨拶し、言葉を交わしにやつてきた。彼を囲んだ四、五人はかつてのキョーヨーガツカの学生たちで、三十年前に私が会つたあの時には、それはほんとうに若々しい青年たちだつた。その何人かのうちに、前田先生の特徴が撒き散らされているのに気付いてはつとする。ひとりには、文章の最後の音節を加速する一種独特のやりかた、またあるひとりには、あのしゃべりっぷり、あの一種の皮肉っぽい調子……。

数歩下がつたところで、私は別の会話に巻き込まれた。おしゃべりの、そして社交の快さというものをかくも愛したあの人、彼がその夕べの会合に今ひとたび足を運んだのは、長患いが生活のさまざま

まな活動に持ち込む幾つもの制限には、これと闘う努力を最後まで続けなければならない、と御自分に言い聞かせてのことだったのだろうか。それともあのガツカイの夕べがおそらく末期の機会と悟っておられたのだろうか。ああして彼の多くの友やかつての学生たち、そして人生が彼に出会いと知己とを許し、だが彼がそのもとからほどなく永遠に立ち去らねばならなくなる多くの人々に、終の暇を乞いに見えたのでもあろうか。だが、彼の態度には悲しさは無論、倦怠感さえ微塵だに認められなかった。時折私は彼を眺めやう。コップを手にして立たれたままだが、今はおひとりであった。彼に話しにきた人達は、今や遠ざかっていた。出席者の大部分は彼を知らず、さもなければ彼の誰たるかを知らず、彼のもとに寄って言葉を掛けるほどには彼と親しくなかった。私の相手ばかりしていたくのも憚られたが、ついさっきのおしゃべりの続きをするのも悪くはあるまいと思つた。まだもう少しの間おひとりでいらつしやるようだったらそちらに行こう、と心に思つた。一、二分やり過ぎた。彼はまだひとりでいた。と、数秒後、その姿はもはやそこには無かつた。その場を後にされたところを私は目にしなかつた。目でその影を求めた。

彼の姿はもうどこにも見えなかつた。

〔稲賀繁美訳〕

（前東京大学教授）

対話巧者

フランソワーズ・サカイ・ブロック

前田教授には好んで人と交わるところがあり、それは天賦のものでした。すすんでお話になることの気安さといえ、ほんとうに稀にみるものでしたし、とても活発なご生活から得られるさまざまな伝聞、珍聞、奇談を広め、ご自身の伝えられる面白おかしく彩りのある逸話を語り明かしては悦に入られるものでした。熱意、敬服、忠誠といったものが、たやすく伺われましたけれど、恨み事はもちろん、けんか腰、恠然たるご追従などほんのかけらも目にすることはありませんでした。ひとは、とかくわが身と他人とをひき較べてみるもので、これは残念なことに我々の世の中に横行していきまけれど、そんなさもしい根性とは無縁なればこそ、あれほどにお強いご人格も育まれたものなのでしょう。でもあのご人格を支えるものがなにかを知っているとか、いかに少しとはいえ、その人生の思索省察の側の秘密に通じている、などと言いつ張るのは、これはむこうみずというものでしょう。師匠に対する感謝の辞は教養学科の古参たちが表明してくれていることでしょう。かれらは師匠の甘えっ子たちで、師匠はこの甘えっ子たちを東京大学の寵児にしてしまったのですから。日本と世界にまたがったかれらの役職の多様さと権能とを見れば、それがそのまま教養学科設立者の靈に捧げられた最良の顕彰となりましょうし、教養学科創設に費やされた倦むことを知らぬ精力の、無駄でなかった

ことをなにもまして証しするものでしよう。わたくしはと言えば、トーダイでの教育の第一歩をしるしたのが、日本に着いていくばくも経たぬうちに前田氏に案内されたコマバでのことであつたのを忘れません。思えば、最初の年の講義は『星の王子さま』！ そのおしまいの試験に挑戦したのはたった一人の女学生、彼女はそれから希臘^{ギリヤ}学者となりわたくしの友人として残りました。三年目のこと、またあるクラスでは、『クリトン』を三人の学生に説明したのですが、皆このおそるべき試験を乗り越えて、いまではひとり青山学院に、ひとりはNHKに、ひとりはフランスのCNRSに勤めています。どれもおしなべて、前田氏のまわりに額を集めた創設者たちの小さなグループが早くから構想していた複専攻制の成功の例といえましょう。

前田氏のパスカルに関するお仕事に言及する労も、かれの同僚、そしてまたかれの熱意と知とを引き継いだお弟子たちにとつていただくこととしましょう。それでも、森の奥にあつた氏の山荘を訪ねた日のことがわたくしの記憶にとどまっています。大きな机ひとつのうえに、いろいろの校訂本や辞書がひろがっており、勉学の活気溢れるたたずまい、そこにはひとつの生涯の選択が同^おわれたものでした。果たしてその折りのことだったでしょうか、フランス人の先生たちが最初どんなに氏の決心を翻させようとしたものかという話を、わたくしになさつたのは。彼らの目にはパスカルはもう研究し尽くされ、すべて知られているように思えた、というわけです。もう今を去ること五十年も前の話になるでしょう。当時、この若者が先達に耳を貸すのを拒んだことを喜ぼうではありませんか。

前田氏の追憶にその友、丸山熊雄氏の追憶を寄り添わすことなく、この文章を終えるわけには参りません。丸山氏もついこの間お亡くなりになりましたが、よくわたくしにも、お二人を結んでいた信

頼と尊敬のきずなを話し聞かせて下さいました。また前田夫人におかれましては、このような連れ合
いをお失いになり、周囲のいたわりに囲まれてあるとは申せ、さぞやおひとりでさみしい思いをされ
たことと拝察申し上げます。

〔稲賀繁美訳〕

（東京大学教師）

前田陽一その人その文

平成元年三月二十二日発行

頒価 五〇〇〇円

編集発行

©「前田陽一その人その文」編集刊行委員会

〒一五三 東京都目黒区駒場三―八―一
東京大学教養学部教養学科フランス科内

製作

財団法人東京大学出版会

〒一―一三 東京都文京区本郷七―三―一 東大構内
電話 〇三―八―一六―四〇九九

印刷所 (株)三秀舎・製本所 牧製本印刷株式会社